

「いいか、皆の者。有事であるが、極秘に、先程伝えた命令を遵守のこと」と

トルシア国王ガイナは、大柄の躰自体を拡声器にしたかのような、低く通る大声で、目前の閣僚、軍上層部に叫んだ。

「反対意見は重々承知。しかし今一番大切なのは、国民の命だ！」

云つて国王は会議室を去つた。

部屋を出た王を追いかけて、閣僚の一人が廊下にて王の背後から問いかけた。

「城は、城の守りはどうするのですか」

「国民を守るのが先決だ」振り向きもせず王は歩きながら答えた。どうせ弱腰の閣僚の、脅えた顔など見たくない。

その時、前から静かに歩み寄る兵が居た。隠密兵のようだった。

「バゼータからの通信です」兵は一通の書状と、一枚の紙を王に差し出した。

書状にはエルト皇国の封がしてあった。

「アレス殿……」呟いてガイナはまず通信に目を通した。

内容は、バゼータにサラが立ち寄り、エルト皇太子、第三皇子、そしてバゼータ王太子と共にヘボリアへ向かった事だった。

そして、書状の封を急いで開けるガイナ……知らず胸が高鳴っていたのは本人にも気付かなかった。思えば、通信士よりも先日のエルト皇太子からの伝令が、そしてジャタからも投じられた書簡が何より役立って

いることは確かだった。

聡明なるトルシア国王陛下

度重なる書状、失礼申し上げます。

以前伝えましたとおり、陛下の大事なお嬢様と共に、バゼータはシムムラレトに居ります。

これよりバゼータ王太子と護衛の者を伴つて、ヘボリアへ向かうこととなりました。

ヘボリアへは我が国も関係する、外交及び貿易交渉の件で参ります。

従前より提案差し上げていた、三国協定への下積みになれば幸いです。思い、向かうこととしております。

そこで僭越ながらお願いがございます。

姫の氏を、「ドマーニ」にしていたたく、陛下に何らかの手立を取って頂きたいと存じます。

わたくしが今朝思わず姫の氏をそう名乗ってしまい……。

これで姫の旅も、何かと都合かと存じまして、勝手ながら判断した次第です。

貴国におかれましても落ち着かぬ事態が続くかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

アレスⅡセル・ブライディン

追記：姫は何事も無く、元気に少年剣士として活躍しておられます。

わたくしも心強い限りです。

アレスがシユムラレト出立直前に、急いで投じた書簡だった。

王は自室へと戻り、エルト皇太子の書状を改めて読み直し、消えかけていた戦士の血が滾り立つのを覚えていた。

——子供達が戦へ！ そして……何という、見事な戦略を！

ガイナの心は、自らが動けないというもどかしさと、次の世代がいち早く戦地へ向かっている頼もしさ、そして不安とで入り乱れていた。ああ、いち早く参戦したい！

しかしその熱い思いは、いまや大国の国王となっているガイナには、叶わぬことだった。

そこへ、静かに王妃が入ってきた。「書状……エルト皇太子ですわね」

「よくわかったな」書状から目を離さずに、無愛想に王は云った。

「よろしければ、後でわたくしにも」

「ああ、是非読んで貰いたい……サラのことも書いてある。彼と一緒に、幾千万の兵を引き連れているよりも安全だろう」

そう云ってガイナは、妻へと書簡を渡した。

「まあ、サラは元気なのね！ よかった。しかも殿下に頼りにされているわ」

后ユーナは、思わずうふふと声にだして笑んでしまいそうだった。しかし、そのような悠長な喜びに浸っている場合ではない。娘にとつては難しいであろう外交問題と共に、危険な未知の地へ向かっているのだ。

しかしユーナは、これも主石の導く力と、賢者の血がなせる業か、それともエルト皇太子と共に行動しているという安心感からなのか、ただ

遠くで見守ることが自分たちの今出来る事、そう瞬時に判断した。そして、「もう許してやってもいいのでは。あなた」

「……わかった！ アレス殿が一緒なら、それもよからうて」

「あなたの目論見どおりになったという風にお考えになっては？」

「むむう。納得いかんが」

「それに、二人は引き寄せ会う運命なのかも。主石が引き合わせているのかも」

「うむ……しかし、娘をみすみす危険に晒すのは、父としてよいことなのだろうか」

「私だって不安です。でも、あの子にはもっと大きな試練が待ちかまえているような気がするのです。これを乗り越えなくては、次に進めない。

それに、あなたは王です。国民全てが家族なのですよ」

王はしばらく考えていたが、「そうか、わかった。姫の捜索隊を撤収させて、ジャタ警護隊に合流させよう」

そうして城周り及び王族、政府の警護より、むしろ国民の警護へと兵力が回されることとなった。

「母上」

王妃は静かに息子の部屋へ入り、近寄った。

「明日から……学校へ行くのはやめにしましょうね」

「え？」

「城から出ないように」

「どういう事？ もしかして姉上が居ない事と関係有るの？」

さすが自分の子だわ——何となく心配を察している、そう気取った

ユーナは、隠し事は出来ないかと心に決めた。

「ええ……でも、これは、国の皆が何事も無いようにとの、御父様のお考えだから。城の警護を、城下にやったの」

「じゃあ……この城は空っぽ？　いつ襲われてもおかしくないの？」

この子の少し弱気な部分、サラと分けられればいいのに……そう感じ
てユーナは思わず微笑みすら浮かべていた。

「そんなことはないわ。警護が二人ついて、しっかりと守って貰えるから。それから、モンダー先生に、明日から普通の勉強も教えて貰うことになるから、外に出ている時間なんかはないわよ」

「えーっ！」

「動かないのもよくないわ、ノテイクト先生にも鍛えて頂かなくちゃね」

「ええーっ！」

トルシア皇太子は剣術が苦手であった……。

労働者風のいでたち——ほとんど襦袢に近い格好をしたガイナ、馬車にて護衛もなしに街へ降り、場末の居酒屋《うつろ舟》へと向かった。

「ごぶさたしてたな、親父」ガイナは長卓に腰掛けると、卓の中に居た禿頭の老人、イムル・プロヌールに話しかけた。

「おや旦那、『お仕事』の方はいいんですか？」

「まあ息抜きも必要だろうが。いつものを」

「なかなかお見えにならないので、新しい取り置きになります」

「ああ——それを込みでの、息抜きだ」

親父と呼ばれた店主は、店内の隅にいた大柄の若い男に目配せすると、

男は奥へと行き、すぐ戻って大樽を易々と抱えてきた。そして店主の脇の長卓の上に置いた。

「置き場に困るんですがね」

「還付だ、客に安くだしてやれ」

店主の笑みが優しく、しかし瞳の奥に探るような鋭い光を宿すものと変わった。

「酒飲みには良い国ですな、全く」

「税率は下がるぞ。この店の広告代にだ」

ガイナは一気に杯を煽ると、店主に空の杯を差し出した。

「で、そのお代で何を？」おかわりを出して静かに店主は問うた。

「娘を——養子にして欲しい」

云いながらガイナは、小さな紙片を店主に差し出した。

「親父、悪いが偉い人になってくれ」

紙片には『ドマーニ、勲一等。官房参与』と記してあった。

「形だけだ——断られてるからな、何度も」

「形だけならお受けしますよ。で、元気な嬢ちゃんはどこらに？」

「バゼータだ。全く、親の気も知らんで」

「そういえば縁談をお進めなんですよね、旦那」

「ああ、偶然だろうが——その相手と一緒にいったらいい」むすくれるガイナ。

「ははは、親孝行じゃあございませんか」穏やかに店主は相好を崩した。

「俺が云ったときには、あれ程反抗してた癖に」

「結果よければ全てよし——ですよ旦那。しかもあの坊ちゃんと一緒にら、大軍を引き連れてるようなものでしょうし」

「うむ、ウチのもそう云ってるが……。『主石が引き合わせる運命』だ
とよ。納得いかん」また杯を煽るガイナ。

おかわりを差し出しながら店主は、「子はいずれ巣立つもの。その時
が来た、ということですよ」

「危なっかしくて見てられん！ まだまだ子供だつ。後先考えずに突っ
走りよる」

「おやおや、旦那に似たんでしようが」

「何だと？」

「私から見たら旦那もまだまだ子供ですよ、そんな格好で場末の飲み屋
に来るなんて。あはは」

ぐうの音も出ないガイナ。

「ところで——『お宅』の方は大丈夫なんですか？ 随分と『垣根』が
出払ったようですが」

「ああ、『取り巻き』に大分やられたが、『垣根』は他所よそで要るからな」

『取り巻き』とは城内の閣僚の事だった。日中開かれた閣議にて『垣根』
即ち城周りの警護を、ジャタ、西部ハルデン、ヘムズなど地方に派遣せ
よ、との国王の命令に、いざ中央部に有事という際の為に閣僚はほぼ反
対したが、城付きの兵は国王の命に従う律となっていたため、強行され
た。

ガイナは一人でも多くの兵を、国民の防衛に回したかったのだ。

閣僚達が我が身の保身ばかり案ずることに深く眉を寄せての一喝だつ
た。

「いざという時には、旦那の後輩を」店主はそう云って、重い酒樽を軽々
と持ってきた若者に目配せした。

「いや、ハエを払う位なら自分で出来るさ。ここも心配だしな。娘を預

けるんだから」

「ええ、気をつけますよ。何なら昔のように『別宅』にして下さいな」

二十一年前の内乱で、ここ《うつる舟》が政権奪回の地下基地となっ
たことを思い出して、二人は静かに笑んだ。

「そう云ってくれると思つてたよ、親父」

「でも、『ごほうび』は遠慮しますよ」

「ああ判つてる。俺もこの店がなくなるのは嫌だ」云つてガイナは分厚
い封筒を長卓に置き、席を立つた。「樽をとつておいてくれ」

封筒には酒樽二桁分の現金が入っていた。

「毎度有難う御座います。これからもごひいきに」

静かな笑みで店主はガイナを見送った。

翌早朝、ヘレトの宿を出てバゼータへの国境へ向かおうとしていた王
女搜索隊の元へ、一通の通信が届けられた。

トルシア城の国王からの命令だった。

「国王は何と？」封を開けて中を読む隊長に、じれったい様子で最も年
若なゼネル・タームが聞いた。

「搜索をやめて、ジャタの警護に付け、ということだ」隊長は答えなが
ら、他の隊員に通信を渡した。

「そんな馬鹿な」搜索隊の中で一番年若なゼネルが通信を見て、叫んで
いた。

「国王の命令に馬鹿も何もないだろう、失敬な」普段は優男のミュー
スが低く云った。しかし、ゼネルの行動は余りにも一本気であった。

「私は——姫を追います！ 今までお世話に成りました」素早く先輩二

人に敬礼してゼネルはすぐさま馬に乗った。
そしてゼネルは独りバゼータ方面へ馬を出した。

ヘルトからジャタへ向かう馬上にて、残る二人の姫警護兵は、ゼネルの動向について話していた。

「あいつ……どうするつもりなのだろう。陛下の命に背くなんて」ミディスが隊長に問うたが、隊長はしばし無言で考え込んでいた。そしてようやく、

「除隊されるのを覚悟の上で、姫を守りたいのだろう——エルト皇太子に叶うわけではないのに」

「やっぱりあいつ、姫のことを！」ミディスは思わず叫んだ。

隊長は苦しい表情も露わに、「女人に盲目になることは、戦士として恥ずるべきことなのだが惜しい……いい兵だったが。さあ、我々はジャタへと急ごう」

と云って馬を進めた。

ヘボリアの中心部、ウィジャムへ向かう折衝団は、護衛隊十名、外務省の渉外局副局長、移民管理局の局長、十二名を加えた、サラ、アレス、ハーン、ギルナ、ミナの総勢十七名となっていた。秋のよく澄んだ大気に満ちる朝日を浴びながら、長い隊列をずーっと見て、サラは改めて、

「随分大袈裟な旅になっちゃったね」

すぐさまハーンが「我慢しろ——死にたいのか」

「いやあ、滅相もない」サラは目的地に到るまでおとなしく馬を進め

た。

一方、落ち着かないのはギルナだった。初日はアレスの馬に同乗していたが、今日はミナの乗る馬車に乗り込んで、どこかせわしげな、焦るような浮かれ調子でずつと話していた。

(ギルナつたら……ミナちゃんの心配してたし) そういや昨夜だつて寝付くまでミナちゃんの心配してたし)

目前に迫る未知の土地への不安が、幼い恋への微笑ましさで幾分か和らいでいた。恋するくらいなら——そんな悪い人たちじゃない筈。

そうして昼過ぎに、一行はウィジャムに到着した。

ウィジャムの村落は、高い木の塀で囲まれ、まるで自ら進んで定住の地を確保しているかの如くだった。そして塀には一つしか門が無く、武装した若い男が二人、門番らしく立っていて、いちはやく護衛隊の物々しい装備に気付き、呼び笛を吹いた。

もう一人は、「何者だ貴様ら！」と怒号を上げ、手にしていた槍を構えた。

あつという間に門から若い武装した男たちがぞろぞろ走り出し、折衝団を門から遠ざけようと体型を組む。

「我々は国王の命での折衝団。通達が来ているはずだ！」と、副団長でもある護衛隊長が叫んだ。「王太子御自ら罷り越されて居られるのだから、控えい」

しかしヘボリアの民はますます殺気だつて、いまやこちらの隊列に襲いかからんとしていた。

「ラトマンナ族だな」アレスが替えた様子もなくぼそりと呟いた。

「どうやらそうらしい」云ってハーンは一步前を出た。サラは不穏な空気を察しながらも、他国の政治的な問題ゆえなりゆきを見守るしかなかつ

た。

「私がヘボリア王太子、ハーン・バル・カリストファル。この地の民と穏便に話し合いたいと、事前に書状も送り、我らが罷るのは知っていた筈だが、この出迎えぶりは——書状を読んでいない様子だな」

横柄な態度の王太子を横目で見ながら、アレスも並び立った。

「私はエルト皇太子、アレスⅡセル・ブライディン。バゼータ王太子の仰せの通り、書状の通り、和解の場を設けんと参った次第だが……どなたか書状が届いたかどうか、内容を知っている者はおらぬか？」

ヘボリアの若者達は、アレスの、落ち着いてはいるが強い、足が凍り付くような強制の力を感じさせるよく通る声に、思わず動きを止めた。

「この村の、まとめ役を呼んでほしい」

アレスのひと言で、若者の一人が門の中へと駆け込み、幾人かの非武装民も出てきたが、ひととき目立ち一番筆頭に現れたのは、若い、やはり武装した、大柄の男だった。

「書状など我が族には来て居らぬ。我らが地に攻め入るといふなら、戦うまでだ」

その時、後方でサラと並んで控えていたミナが小さく呟いた。

「おじさん」

「え？」サラは思わず訊いた。「おじさんって……こないだ話していたあの怖いおじさん？」

「うん、でも私のおじさん」

サラは愕然とした。己の姪を売った男が、この民たちの代表といふのか？

片耳でその小さな声を聞き取りながら、アレスは若者に問うた。「君が、この村の代表か？」

「ああ、そうだ」

「ヘボリウーナの代表、バルトリ殿でよろしいか？」

「その通りだ」

息詰まる問答にも、アレスは動ぜず、極めて冷静に後方へ下がり、ミナの元に戻ってきた。「さあ、おばあさんに会わせてあげよう」

そう云ってミナの手を取り、前方へと戻り、バルトリと名乗った若い男に再び対面した。

「この子は、君の親族ではないのか？」

バルトリはしばし黙っていたが、「俺には家族など居ない」

その言葉にミナは思わず叫んでいた。

「おじさん！」そして涙を流した。

アレスは手拭いを出し、屈んでミナの涙を拭いてから、そのままバルトリを見上げて、冷静なまま云った。

「君が親族でないとしても、この子を家族に会わせたい——移民法については、寛大な措置を執る」

「知らぬと云ったら知らぬ」

そうして周囲の民も騒然となり、やがて怒号が飛び交い、石を投げつける者も出始めたので、隊列はじりじりと後退した。

怒号の民の中に、涙を流しながらじっとミナをみていた老婆の姿があった。

折衝団はやむを得ず手前の街、レトセに戻る事となった。レトセはヘボリア監視の為に作られた街で、官憲及び兵士、吏員が多く駐在し、大きな訓練施設や武器庫、宿泊所も建設されていた。ある意味、軍事基

地であった。そこで対策を練り、翌日改めて門へと向かおうという事でアレスとハーンの意見が一致した。

レトセはそれほど遠い距離ではなかった。望遠鏡さえ有ればウイジャムの柵の全景が見て取れる程だった。道すがら、ぼやくように、

「バルトリの話……こいつがな、相当血気盛んな奴で」ハーンは眉根を寄せた。「何せ、身内でも反対する者には制裁を加えるらしい」

「制裁って……」ひとこと口にして、サラは云い淀んだ。そして青ざめた顔を歪めた。「身内なのに？」信じられない様子をあからさまにしていた。

「それが奴らのやり方だ」ハーンは吐き捨てるように云った。

「でも、そうじゃなかったら、身内は大事にするんでしょ？」救いを求めるように、サラは云った。

ミナの祖母、サナハ・バルトリは、ムンディの母、つまり「おじさん」

は、急進派ヘポリウーナの旗手と名指しされるムンディ・バルトリになる。実の姪を売りに出すムンディのさもしさにサラは呆れて失望していたが、そういった者も出てくること、ノーラデン流の資本主義とバゼータ流の拝金主義が入り込んでいることの証明であった。

「親族を、姪っ子を売るなんて、ひどい」

「そこまでして欲しい物があるということなんだ」アレスが、珍しく致し方ないという感情を露わに呟いた。

「欲しいって、お金でしょ？ 姪っ子よりも、お金のの？」

「金が有れば武器も身分も買えるさ。この国では」そう云ってアレスはハーンの方に冷たげに瑠璃の瞳を呉れてやった。

「何だその顔は」ハーンは怒ったように云った。

「こういう顔だ、悪かったな」アレスは素知らぬ風だった。

まもなくレトセに到着すると、サラはまさしく軍事基地の様相を呈する街に唾然とした。聞いていたよりも大きい施設……高樓を伴う大きな建物は司令部だろうし、両袖にかなりの部屋数——どんな軍のお偉いさんが来てもそれぞれ部屋を与えることが出来るだろう。そして後方には幾つもの宿泊施設。訓練所も複数あり、おまけに資源用の施設の大きいこと。これでは街ではない、出城だ。

——監視してる……これじゃヘポリアの人たちが、警戒するのも無理はない……。サラはまるで城壁のような頑健な煉瓦造りの塀を眺めながらそう思った。

塀に一つだけ鉄壁で作られた門をくぐり、レトセに入ると、ハーンが、「アレス、そして、副団長、私の部屋に来てくれ」と促し、荷物をレトセ常駐の兵に預けるように指示した。

一方、サラとギルナは、数ある宿泊所の中で、おそらく高官向けの大きな部屋に案内された。アレスを加えた三人で今夜休むことになるらしい。高官向けの部屋はそう多くないらしく、ハーン、副団長、渉外局副局長、ミナとその監視役である渉外局員で埋まっていて、他国者の一つ部屋に押し込まれた形だった。それでも大きな部屋に、サラもギルナも不満はなかった。

それにしても、大きな部屋でゆっくり休む気にはなれなかった。

今頃アレスは、解決できるかどうかかわからない問題に難儀しているだろうから……。

「この間に稽古でもしようか？」思わず体を動かして不安を取り除きたくてサラはギルナにそう云ってみた。

「いいの？ やった！」

早速訓練所から木刀を借りて中庭で稽古となった。

ギルナは木刀を手にすると、嬉しそうにはしゃいで声高に訓練所の兵に礼を云い、そのまま浮かれ気味に撥ねながら中庭に向かった。

中庭に到り、互いに礼をして、木刀を構える。

「じゃ、私が受けるから、攻めておいで」

サラは木刀を中段に構えて待つと、ギルナはいきなり上段構えを見せ、「いくよ！」と叫んで腰を浮かせ気味に駆けてきた。

振り下るされるギルナの木刀を、サラはたやすく右手一本の握りで弾き上げる。ギルナの木刀はパンと軽い音を立てて地面へ落ちた。

「痛い！」ギルナは右手を左手で包み、地面にべたりと尻を付けて鳴き声を上げた。「ひどいじゃないかあ」

「ひどくないよ、受けただけのつもりなのに……ちゃんと柄握ってないでしょ。さあ、拾ってもう一度おいで」

ギルナはしぶしぶ立ち上がり木刀を拾い、再び柄を握った。

構え方になってない——へっぴり腰もいいところじゃないか……サラはぼやきそうになった。

「しっかり振ってごらん」

「えいつ！」気の抜けたかけ声と共に、ギルナがまたサラの正面を狙う。今度は柄を右前に構えがっしり受けたが、それでもギルナは体ごと弾き飛ばされ、また地面に尻餅をついた。

「腰が入ってない。浮いてるよ」とサラは軽く云った。「さあ立って、もう一度……って構えから教えた方がいいかな？」

刀を手にする際に抱いてはならない疑念が湧く——それでもまだギルナは地べたの上だった。

(ああ、これじゃ稽古にならないや)

剣士として本来恥ずべき問いもしたくなる。

「基本、学んだよね」

「やってるよ！」ギルナがようやく立ち上がり、悔しそうに叫ぶ。「僕にだって師匠はいるんだもん」

「へえ、厳しいのかい？」

ギルナはしばし押し黙っていたが、やがて、「サラほどは怖くない」と呟いた。

——私が怖い方なのか？ ノティクト先生なら、さて……ここですり足を一刻ほどさせられるよな……。そうやって基本をたたき込まれたよなあ……。

サラは、ギルナとの心構えの差に、思わずため息が出そうだった。

「やつぱり、構えと素振り、やろうか？」

云ってサラは、ギルナに刀を拾わせ、柄の握り方と立ち構えを、まさに手取り足取り指導する羽目になった。しかし何度教えてもなかなか様にならないギルナに忸怩たる思いを隠しきれなくなったサラ、

「ほれ、こうして振るの！」

実演して見せる方が早いし性格に合っていた。

「早くて見えないよう」また泣き言のギルナに、

「剣士は泣き言いわないの！ 君のお師匠さんもそう教えなかったか？」

「教わってないよう」

しばし立ち止まり柄を握る手を下ろしたサラ。

「え？ 剣士の精神とか、教わってないの？」

「うん」

「お城に居る先生だよね……」

「そうだよ、お義母様が連れてきたんだ」

お義母様——エルト皇后か……。

これじゃ甘やかしすぎだ、でも、甘やかしているだけなのか？ 義理とはいえ、自分の息子に自らを守る術を会得させていないとは……。この年で構えも出来ていないなんて、私の弟より危険じゃないか。いつ襲われてもおかしくない立場なのに……。でもそれって、わざと？

サラはいけないと思いつつも、湧き起る疑念にすっかり心を奪われ、稽古中であることも忘れかけていた。

その時、

「やっつ！」

ギルナの木刀が振り降りてくる。

構えても居なかつたサラは、咄嗟に脇へと飛んだ。

ス力を喰らってギルナは顔から土につんのめって転んでいた。

「ひどいよう〜」顔の泥と涙をぬぐいながら、ギルナはまた泣き言だった。

「ひどくないよ。よけることもありだ」

云いながら、これじゃ自分の稽古にはならないし、却って頭が疲れるから、しばらく素振りさせて、最後に立ち会いするか、とサラは判断した。そして自分も素振りし、すり足と構えで感を取り戻しながらも、先程浮かんだ疑念——エルト皇后の考えが振り払えずに、彼女としてはめくら打ちのような稽古になってしまっていた。

（エルトの大会までに調整できるかなあ？ あと五日か……）

そんな欲も、サラの剣筋を惑わせていたかもしれない。

ゼネルは一人、シムラレトに到着していた。

長身で銀髪の男、より長身の金髪の男、そして少年の三人の剣士を見かけなかつたかと一日探したが、たいした手がかりも得ず、夜を迎え、やさぐれてある酒場へと入った。そこが数日前の昼、アレス一行がミナを保護するため立ち寄った店だと、ゼネルは知るべくもなかつた。

「あらお兄さん、見ない顔ね——他国から？」

女将の艶やかな問いに、ゼネルは黙って酒をあおった。

「随分と荒れてるじゃないの——好きな娘にでも逃げられたのかしら？」

ゼネルは急に顔色を変えたが、また気を紛らすように酒をあおって頭をひとむしりした。

「少年姿の剣士を見なかつたか？ 同行しているのは長身の——銀髪の男、それから金髪で派手な出で立ちの剣士と一緒だと思うが」

女将ははつとして、数日前の王太子来訪を——そして銀髪の男の美しさを想い出した。

「どうした？ 心当たりがあるのか？」

しばし安心してた女将に、きつい口調でゼネルは訊いた。

「ええ覚えてますとも——さる高貴な身分のお得意様と——そりゃもうこの世のものとも思えぬ男前の銀髪のお方、それから小さな剣士、確かに参りましたわ」

「そ、その時の事を詳しく話してくれないか？」

ゼネルは思わず女将の肩をつかみ問うた。

「そ、それは——困りますわ……まあ、もう少しお呑みになって」酒を注がれてゼネルはさらにそれを一気にあおった。「云えぬのか？」剣柄

に手を掛け、ゼネルは吐いた。もはや脅しであった。

「ま、まあ落ち着いて下さいな」

このような悪漢には慣れた様子で、女将は店の女中に「今日はもう看板よ、あんた、お帰んなさい」

「でも、まだお客様が……」女中は青ざめながら呟いた。

「いいから。あたしに任せて。気をつけて帰るのよ」

女将の静かな物言いに、他の客も状況を察したのか、それぞれ勘定を済ませて店から出て行った。ゼネルの荒れ方で、落ち着いて酒を味わう事など出来なかったこともあるだろう。

店にはゼネルと女将、二人きりになった。

「あんた——その探してる人たちのことで、辛い思いしてるのね」

女将はそつとゼネルの杯に酒を注ぎながら優しく、そしてややなまめかしく云った。

ゼネルは黙り込んでいた。

「あたしもね——」女将は自分の杯に酒を注ぎ、「あの人のことで、せつない想いだわ」女将の頬に赤みが差し、夢見るような、手の届かないものへの憧憬が浮かんでいた。

「同じ想いつてことか」やつとゼネルが落ち着いた口調になった。

「そう、辛い者同士ね、あたしたち」女将は一気に杯をおおった。

ゼネルは女将に酒を注いで「どうにもならない想い、か」

「こういう商売やっているとありがちだけどね——」今度は女将がゼネルの杯に酒を注ぐ。「今回ばかりは、せつないわ」

二人は長いこと黙り込んで、互いの杯に酒を注ぎ、飲み続けた。

しかしその後、女将は、

「でもあんた……よく見ると可愛い顔してるのね。案外あたし好みか

も」

そう云つて女将はゼネルにしなだれかかった。

「あんたなら……あの人の事、忘れさせてくれるかもね」

ゼネルは、女将の髪の毛の芳醇な香りと吐息、薄手の衣に包まれた豊満な柔らかい女体、大きく開いた胸元からのぞく谷間に眩暈を覚えた。頭が煮えたぎりそうだ……こんな感覚、初めてだ……。

「俺も……忘れられるものなら、忘れたい」

そしてその感覚に引き摺られて、女将の唇を激しく吸った。女将もそれに応じてゼネル以上に吸い返してきた。

「抱いて」接吻の合間に漏れたひと言で、彼らは奥の間へとなだれ込んだ。

こうしてゼネルは女将と一晚を共にした。

欲情にかられての事なのか、互いに想い人の事を重ねたのか、それぞれの心の内にしかわからない。

朝になつても、裸のままの女将は、同じく裸のままのゼネルの腕の中に居た。

「ねえ、しばらくココにおいでなさいよ……あんたなら、いいわ。用心棒も欲しいところだったし……お願い、ココに居てよ」

しかしゼネルは寝台から抜け出し、鍛えられた肉体に衣服をまといだした。

「心遣いは有難いが……やはり人を追う」

云い残してゼネルは素早く店を出た。

女の肌の魅力に判断を鈍らせたゼネルだったが——欲情を放出してし

まった瞬間、やはり思い出したのはサラの顔だった。しかし女将の肌は朝までゼネルを確かに惹き付けていた。ゼネルは悩んだ。このままここで、この女と過ごすのもいい。もはや戻る国はない……しかし……。

そして心身ともにくたびれて、そのまま眠りについたが、目覚めて朝の光を浴びた時、やはり自分に来る事はただ一つ——後ろ盾を一切失った自分一人でも、サラを追い、彼女を守り続けることなのだ、と確信するに至った。

忘れられない！ 俺が姫を守る！

そのゆきすぎた想いが、後々どんな悲劇を生むことになるか、その時の彼には判るべくもなかった。

アレス・サラ・ギルナが与えられた部屋は、寝台二つのものだった。応接一式の長椅子に誰かが横になる。昼間、サラに散々稽古を付けられたギルナは、夕食が住むなり寝台を一つ占めて高いびきであった。

アレスが夕食を済ませて部屋に戻った頃、ひとしきり眠って目が覚めたギルナは、あまり捗らなかつたらしい会議に疲れ気味のアレスに甘えるが、アレスが苦い顔をする、ギルナはハーンの部屋へと向かった。

「ハーンも疲れているだろうから、あまり長居するなよ」

「うんわかつてる」判っている様子もなくはじけた風にギルナは部屋を飛び出していった。

「大丈夫かな……」

「俺としては楽だがな——まあハーンになついているから大丈夫だろう、預けておこう。さて、一杯やるか？」軽く笑い、酒瓶と杯を並べようと立ち上がるアレス。

「お前は眠くないのか？」飲み物を用意しながら、アレスが訝しげに少し眉根を寄せてサラに訊いた。勿論サラにはその表情をみせないように。「受け流すだけでもん、ほとんど空振りだし」アレスの心配顔をみないお陰で、サラは明るく答えていた。「馬に乗ってばかりだったもの、体ほぐすのに丁度良かった……」

その時、廊下から扉を静かに叩く音がした。アレスが立ち上がり扉の前へ歩み誰何すると、

「ゲーデスでございます」

即座にアレスは扉を開け、客人を部屋へと招き入れた。「わざわざお越し下さるとは」アレスは長椅子をゲーデスに勧めた。

「いえ殿下、こちらこそ大変申し訳御座いませぬ……若い者達が失礼いたしました——詫びの言葉も見つかりませぬ」

処々ほつれのある重そうな外套の風体の老人にサラははつとして、

「ゲーデスさん？」

「ああ、そうでございますとも『サラ殿』でよろしかったでしょうか、ルナ・マスター」

長椅子に腰掛けずにゲーデスは、床に膝を付き、アレスとサラに深々と頭を垂れた。

静かだが——もの凄い闇気を秘めている。その大きな背を目にして、サラも——アレスですらしばし動けなくなる程の戦慄を覚えたが、アレスはゆつくりと老人の肩に手を置き、「どうぞ頭を上げ、お掛け下さいませ、師よ」そう云って椅子へと促した。

アレスは対の椅子に腰を下ろし、「サラ、お前も」そうして二人が席に着くと、ゲーデスはようやく腰を上げ、長椅子側へと掛けた。

「明日、事が済んだら、是非お目にかかりたいと思っていました」

「いえこちらこそ——今日のうちに伝えなければならぬと思ひまして、夜分お疲れとは重々承知の上でしたが、失礼ながら参った次第で」

「今日中に？」とサラ。

「ええ、明日では間に合わぬような気が致しましての——これも血のなせる業、いや恩恵でしょうか……」

謎めいた言葉を吐くゲーデスに呼応したのか、アレスも急がねば何かを失う、という理由もない危惧を覚えた。

「師は確か……力の賢者の」

「ええ」

「祖父の時代——申し訳ないことを致しました」神妙に頭を下げるアレスに、ゲーデスは慌てて、

「いえ！先皇もやむを得ぬとのご判断であらせられた、儂はそう思っております。却つて皇国を危うい立場にした自分が恥ずかしく……」

「それでこの地へ」

「はい」

「道中、トルシア經由で宝珠を残したのも、ジャタのルドさんに言伝えたのも、あなたですわね、師よ」

「仰せの通りです——然るべき日にあなた方がこの地に罷り越され、その宝珠の意味を——あなた方が全ての宝珠の主であると顕れるように……少しばかり小細工を致しました——ルナ・マスターよ」

ゲーデスは改めて頭を低くした。

サラは先程の会話から、自分たち二人に対してルナ・マスターへとゲーデスが呼びかけていることをやっと感じ取った。

「私たち二人が、ルナ・マスター？」

「はい、お二人が、で御座います。儂も、エルトにいる頃はそれが判ら

ず、今では悔いる過ちを……」

「過ち？」とアレス

「それは後ほど話します——先ず、お二人に見て頂きたいものが——」そう云つてゲーデスは携えてきた杖を手にした。

「これが、水の宝珠です——いや、正しくは、水の一つ」

「なるほど、もう一つは、他の誰かが」

「それも追つて話します……」ゲーデスはやや哀しげな表情になつたが、すぐ改め厳かに続けた。

「これでルナ・マスターの元に、火、風の一つ、水の一つ、そして主石が集つたことになります。明日、風は揃うでしょう」

さして脅えてもいない様子で、「怖ろしい力が集つている、ということか」とアレスは云つた。「しかし正教に於いては——ルナ・マスターの存在は否定されている。なのに何故、賢者の血を引くあなたが、ルナ・マスターと主石のことを口になさる？」

「……それもこの地に來た理由の一つですが——この地には、ルナ・マスターに似た伝承が残っております」

「ほう、それは存じませんでした。是非にご教授願いたい」

「はい『風の神の怒りに触れし時、神の使い顕れ、この地を焼き尽くす』という伝承に御座います」

サラは青ざめた。自分が見てきた夢と同じ——！

「そんな……そんな怖ろしい言い伝えが……」椅子に掛けたままでもめまいを覚え、サラは一瞬気が遠くなり体を傾

げた。

「サラ！ どうした？」無意識にアレスは、傾いだサラの体を支えるべく手を伸ばしていた。

「う、うん、少しめまいがただけ」アレスが伸ばした腕の中で、サラは頭を振った。案じながらもアレスは、その腕の力を緩め、まだふらついている様子のサラの肩を支えた。

「ご覧に成られているんですね——サラ殿」

目の前の老人は、たじろぎもせず、ぼつりと呟いた。

「そして殿下も——」

サラの肩を支えたまま、アレスはゲーデスを見た。

全てを見通している——。